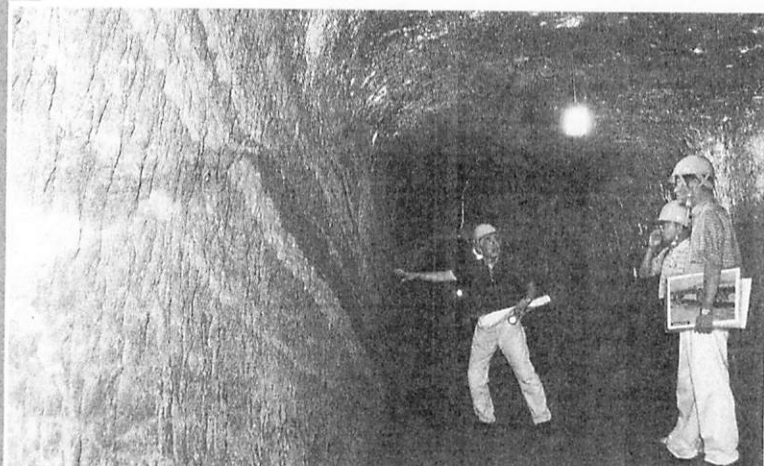


闇が語る軍都の歴史



赤山地下壕跡をガイドする愛沢伸雄代表(中央)は元高校社会科教諭。壁には地層のずれがくっきり見え、「地学の教材としても素晴らしい場所」=館山市宮城

若者や家族連れを中心に多くの海水浴客がふれ、花火大会開催時には露店が所狭しと並び、県内有数の行楽地、館山の夏の姿。その華やかさは対照的に、東京湾の入り口に位置することはかつて「東京湾要塞」として首都防衛の一画を担い、さまざまな軍事施設が置かれた。

戦跡唯一の市指定史跡「赤山地下壕跡」がその代表だ。うっそうと生い茂る木々に隠れるようにして、にぎわう市営プールの横にひっそりと入り口があった。足を踏み入れると、真夏とは思えないひんやりとした空気が肌をなでる。69年前から時が止まっているような妖しさ。狭い通路を抜けるながら進むと、高さ約4層もある巨大な部屋がいくつもあり、壁にはツルハシで削った跡が鮮明に残る。

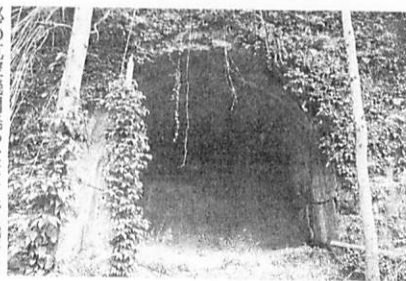
戦禍を刻む

69年目の夏に

第2部 場所ものがたり

…1…

日本の戦後 ここに始まる



洲ノ埼海軍航空隊射撃場のコンクリートには、今でも戦闘機の弾が埋まっている。館山市宮名

秘の航空機開発や実験など機密性の高い部隊が置かれていた可能性を指摘。終戦を知らされず、8月16日以降も数日にわたって待機する人がいたという証言もあるという。

ある男性が戦後40年間近く住み着き、温度が一定に保てることからキノコを栽培。愛沢代表は「この人は戦時中、何をしていたと思っただけでなく、観光資源としても定着してきた」。

空爆から戦闘機を守るための掩体壕(えんたいごう)、洲ノ埼航空隊の「戦闘指揮所」とされる地下壕跡や、機銃調整で使用された射撃場跡に今も突き刺さったままの戦闘機の弾。市内の至る所に生々しく残る。歴史の証人。たちを見て、海上自衛隊館山航空基地の正門近くにある海岸を最後に訪れた。

日本が降伏文書に調印した翌日の1945年9月3日、米軍が本土初上陸した海岸。館山は本土で唯一、4日間の直接軍政が敷かれた。「ここから日本の戦後が始まった」と愛沢代表。私有地に残る戦跡の保存方法など課題もあり。「館山と戦争は切っても切れない。当時を知る方々が少なくなる中、戦跡を通して歴史を受け継いでいかなければいけない」と結んだ。

(社会部・鈴木次)

赤山地下壕跡など(館山市)